

「弥生さんの夏休み」—コロナ下の上海旅行記—

浅井和子

上海へ

2022年7月中旬、次女と孫(15歳男子)の住む上海へ行ってみよう、と思い立った。コロナ感染対策の到着時ホテル隔離も1週間に短縮されている。早速、ビサの申請を問い合わせたところ、「親族訪問」なら可能という。戸籍謄本等の書類を整え、業者を通じて無事に7月下旬にはビザを取得した。出発は8月11日なので、それに合わせて、娘から要望の土産品の数々を整えていたところ、中国へ出国するには、コロナ感染対策の「健康コード」を申請せねばならないという。それは、出発の2日前と24時間以内の2度のPCR検査の結果を添えて申請する。

Wechat(中国でのLINEのようなもの)を通じての会話:

私:「何処へ申請するの?」

娘:「中国大使館」

私:「え〜! 自分で中国大使館まで行くの?!」

娘:「あ〜あ、石器時代の人と話しているみたい。ネット申請よ。」

さあ、それからが大変! 2日前のPCR検査は8月9日午前中に済ませ、夕方には結果表を取得したが、24時間以内のPCR検査は、出発が8月11日、午後4時55分なので、前日10日の午後5時に中国大使館指定の病院に予約し、検査を受けた。娘からは結果表は紙でもらうように、とのことであったが、午後5時に受けた検査は、夜9時ごろにメール(PDF)で届くという。翌日の出発日は、祝日なので、紙でもらうことは出来ない。これは申請の不安材料の一つとなった。

健康コードの申請は、中国大使館所定のネット上のフォーマットにパスポート情報等と共に、PCR検査表をUploadする、という。Upload??? Down loadの反対だろうと思うのだが、具体的にどうするのか、全く不明。しかも、パソコンからでなく、スマホからの申請が絶対良い、との次女からのアドバイス。スマホからの申請となると、老眼の私には細かい字や小さな機器の操作はお手上げ。隣に住む、長女夫婦を頼らざるを得ない。長女夫婦は、私を成田まで見送ってくれることになっているが、健康コードの申請までお願いすることになる。

10日午後9時ごろ、約束どおり、私の携帯に24時間以内PCR検査陰性の結果表がPDFで送付されてきた。

さあ〜、健康コードの申請開始。私の携帯を使って、長女の夫が操作するも、自分の機種と違うため、操作が上手くいかない。結局、誰の携帯を使って操作しても良いとわかるまでに、2時間余りを要し、それからは彼が自分の携帯を操作して、健康コード申請を完了したのは、夜中1時過ぎになって

いた。最後の夕食の為と、用意していたカツオのタタキなどもすっかり味が落ち、3人とも無口で、翌日の出発を午後2時と決めて、解散したのは、夜中2時半を回っていた。

翌朝、出発当日、健康コードの申請は成功したことが分り、午後2時過ぎに成田に向かった。成田でも携帯でQRコードを読み取り、そこにパスポート情報等を入力せねばならない。ここでも長女の夫の助けが無ければ、飛行機にも乗れない有様であった。

何とか無事に搭乗した上海直行の中国国際航空便は満席で、客室乗務員は、白い宇宙服様の防御服にゴーグルを着けており、これでは、久しぶりの国際線も enjoy する気分にはなれなかった。

上海空港に到着

飛行機は定刻の30分前、現地時間午後6時30分に上海浦東国際空港に到着した。わずか2時間30分の飛行である。北京から上海への飛行時間も2時間10分から20分だそうだから、あまり変わらない。同じ中国内の都市からと日本の都市からとの距離があまり変わらないとは。中国の広大さと同時に日本と中国の至近さに改めて驚く。

飛行場ではPCR検査や入国手続きに時間を要する、と事前に聞いていたので、その覚悟はしていた。が、ここでもQRコードの読み取りと、情報の入力である。現地の住所なども入力せねばならず、私にはどうも出来ない。「中国人は親切だから、助けて下さい、という中国語だけを覚えておけばよい」との次女のアドバイスを思い出し、私の後ろで列に並んでいた若い男性にお願いした。

彼は、日本の大学に留学中で、夏休みで帰国したとのこと。日本人と言われてもおかしくない流暢な日本語を話し、大学卒業後は日本で就職したい、と言う。理由を尋ねると、中国は所得格差が大き過ぎるから、とのこと。

隔離ホテルで

さて、隔離ホテルは、自分の住所地区によって指定されていたので、親切な大学生とは別れた。次女の住所は、上海の旧市街で、飛行場のある浦東(黄浦江という川の東)から離れた浦西の長寧区にあり、その一流ホテルの一つと言われるホテルに隔離されることになった。8月11日、午後6時半に浦東国際飛行場に到着後、専用のバスで長寧区のホテルに到着したのは夜10時半を回っていた。ホテルに到着した、と言っても、当りは真っ暗で、大きな建物の裏口。ここで、再び、列をつくり小1時間、順番を待った。いやしくも、ホテルの客に、こんな処遇はないだろう、と腹が立ったが、どうしようもない。建物の入り口や内部の壁や通路は、全面、工事用のビニールシートで覆われ、防御服にゴーグル姿の担当官が、このホテルで隔離される客、一人一人に部屋を割り宛てている。私は12階、1229号を割り当てられた。一人でその部屋に行くのかと思い、エレベーターの前まで行ったところ、エレベーターのドアに「汚染電梯」(汚染エレベーター)と書いてある。まさか、このエレベーターではな

く、別のエレベーターがあるのだろうと、部屋を割当てた担当官のところに戻ってきたら、「ちょっと待って。今案内する」と言われた。別の担当官が来て、何と汚染エレベーターに乗せられるではないか。エレベーターの中は勿論、工事中用ビニールシートで覆われている。

12階まで上がった。エレベーターを降りると、部屋に続く通路のカーペットの上もビニールシート。1229号室に入った。これまた、床のカーペットも工事中用ビニールシートで覆われているではないか！椅子やテーブルなどの家具は、一流ホテルらしくアンティーク調で高級。あっけにと取られていると、黄色の大きなビニール袋10枚ぐらいいと、消毒用のスプレー等が配られてきた。毎朝、ビニール袋にゴミを入れ消毒し、きつく縛って、廊下に出すようにとのこと。

やっと、理解した！我々、外国からの入国者は、ホテルの客ではなく、余計な汚染物、汚物なのだ。だから、担当者は、汚染物から自分の身を守る為の防御服を着ているのだ。飛行機の客室乗務員から始まり、飛行場に居た全スタッフ、バスの添乗員、ホテルの担当者等々、我々と接した全員は防御服を着て、ゴーグルを付けていた。

今日は long day だった。バスタブにたっぷりお湯を入れ、冷房で冷えた体を温めた。丁度、午前零時。

翌朝、7時半にドアをノックされ、目を覚ました。ドアの外に朝食が配られたのだ。窓のカーテンを開けると、眼下には両側に街路樹が茂った大通りが見え、まだ早朝なのか、車が数台とオートバイが走っていた。右側通行のようである。いよいよ今日から、1週間の隔離生活。床のビニールを除けば、部屋はデラックスだし、見晴らしも良い。3度の食事は付いている。中国語を勉強するのが、今回の主たる目的だから、中国語の勉強と称して、テレビも見放題。本来、ぐーたらな私にとって、こんなハッピーな時間を過ごせるなんて、と嬉しくなった。

そう言えば、昨夜は、夕食を取っていない。ホテルの裏口で順番を待っていた時、日式と書いた大きなカップラーメンが配られたが。ホテルの朝食のお弁当は、お粥と大きな肉まん風の万頭だった。完食した。パソコンを机の上に出したり、部屋を整えたりしていると、防御服の担当官が検温をしにやってきた。これからは毎日の検温と2日に一度のPCR検査を受けることになる。そうこうしていると昼食が届いた。そこで、気が付いた。3度の食事を完食してはいけない。部屋から1歩も出てはいけないので、運動不足になる。これ以上、体重を増やしてはいけないのだ。昼食を半分ぐらい残して、さて、午後はどうしようか。中国語の勉強とは言え、(つまらない習性か)昼からテレビドラマを見るわけにもいかないので、ホテルに入る時に貰ったチラシ、「ホテル隔離中の注意」らしき文章の漢字の発音を、持参した電子辞書で一つ一つ調べることにした。直ぐにノート一杯になるのだが、同じ漢字を何度も調べたり、何度発音してもどうしても覚えられなかったりで、岩盤のようになった私の脳ミソは、新しい記憶のミゾを彫ってくれない。辞書引きに飽きると、窓から遠くのビル群を見ながら、

「最後に上海に来たのは何時だったかな～。20年前か？その後、随分発展したのだろうか～。最初に中国に来た時は、まだ皆、人民服を着ていたな～」等と思い出したりしていた。

「中国人は個人主義だから、各自が自己の利益を求めて、しのぎを削っている。まさに競争社会。従って、社会は発展する。競争が苦手な人もいるわけだから、必然的に格差社会になる。格差社会は元気な社会とも言えるかもしれない。飛行場であった学生さんによると、中国は日本より格差が大きいとのこと。中国社会で生きていくのは、しんどいだろうな～。自我の強い国民を束ねるには強権が必要なのかもしれない。」などと思ったりした。

また、日中は40度を超す暑さだそうだが、このホテルの中は24時間冷房が効いて寒いくらい。目の前のビルは夜になると、綺麗なネオンが点灯するし、この広い国土の電力を賄うのは大変なことだな…と思った。調べてみると火力発電が70%近い。これは石炭が豊富な由である。その次は山峡ダムを筆頭とする水力発電が18.6%を賄っている。自然エネルギーは2010年代より少しずつ開発されており、原子力発電所については、現在、運転中や建設中の原子力発電所は合計77基とのこと、この数は世界2位の数だそう。やはり原子力発電に頼らざるを得ないのだろう。

上海に着いた日は8月11日木曜日夜で、初日は金曜日。そして初めての週末を迎えた。ホテルでは、通常サイズのタオル1枚と湯上げタオル1枚しか備え付けがなく、1週間の隔離中、部屋の掃除等のサービスは一切無い。忽ち、タオルが不足して、娘に差入れを頼んだ。真昼の暑さを避けて、夜9時ごろにホテルの下の広場から、「今、届けた～」とWechatの電話が入り、2人の影が手を振っている。「早く、ここを出たいな～」と思う。

月曜日になり、パソコンを開くとメールが沢山入っているようだが、スムーズに受信できない。ホテルのWIFIが弱いのかと午前中一杯、辛抱強く接続を繰り返していたが、一向に進展しない。ホテルの担当者に、「ネットが繋がらないので、仕事が出来ない」とクレームをつけた。そしたら、何とその答えが、「我々のホテルは、外国のネットワークに対応していない」という。

「ホテルでしょ！ 外国のお客に対応しないの?!」と、私は思わず叫びそうになったが、そこは一息ついて電話を切った。「そうなんだ。ホテルは、外国の客など必要無いのだ。中国国内の14億人の人々を相手にすればビジネスは成り立つのだ」と、思った。日本とのメールのやり取りは、WIFIのご機嫌従いで、時々、送受信出来る。日本のクライアントには、木曜日にこのホテルを脱出するので、それまではご迷惑をお掛けします、と送信しておいた(このメッセージは送信されたようだ)。

このホテルに5泊したころ、毎食、プラスチックの弁当箱に入った脂っこい中華料理に飽きてきた。2日後の木曜日にホテルを出るので、その晩は、娘のうちに生野菜が食べられるよう、「生野菜が食べたいので、よろしく」というメッセージを娘のWechatに送った。火曜日の朝10時ごろのことである。私としては、娘は会社勤めで忙しいし、何か予定があるかもしれない。前もって伝えないと、彼女の買物の時間がないだろう、と思ったのだ。そしたら、何と1時間後に、サラダがホテルの部屋に配達されてきた!

「もうサラダが届いたよ～。木曜までに野菜を買ってと頼んだつもりだったのに」と娘にWechatでメッセージを流したら、電話が掛かってきて、

「お母様、食事食材も何でも携帯でその場で注文するのが当たり前。誰も、ここでは、そんな先の日の食材を考える人はいません。普段の夕食の食材も、会社帰りの地下鉄の中で、スマホで注文すれば、私が帰宅するより前に、ちゃんと部屋の前にデリバリーされています。買物なんて行かなくていいんです、弥生さん。」

と言われてしまった。「へ～！ それでは生産性があがるはずだー。」娘は私がサラダが食べたいという WeChat のメッセージを見て、即時にスマホから注文、サラダはホテル近くの店からすぐ配達されたという訳である。「弥生さんかー。まあ、縄文さんと呼ばれるよりは、マシか」と、弥生さんと呼ばれるのを受諾した。

進化した都市に住む上海人は、必要なものは、その時点で、直ぐに注文する。スマホひと押しで入手する。2日後の事を考え、前もって買物を依頼する発想の弥生人にビックリした、とは娘の弁。

隔離ホテルからの解放

ホテルから解放される日の8月18日木曜日は、午前中に予定どおり PCR 検査があり、夕方には検査結果がホテルに到着し、解放される予定だった。が、午後6時過ぎても、解放される兆しが無い。ホテルのフロントに問い合わせても、PCR 検査結果が届かない、というばかり。そのうち、また夕食が配達されてきた。PCR 検査が陽性だったら、直ぐに結果が来るだろうに等と思いながら、夕食を食べずに、待っていたら、8時ごろ、PCR 検査の結果が来たという。それでは自宅(娘のウチ)に帰れると、喜んでいたら、今度は、車の手配が出来ないので、明朝になる、と告げられた。「あ～あ、仕方がないなー」と諦め、もう一晩ホテル泊となった。

翌朝は、体温を測り、抗原検査を受けて目出度くパスし、今度は私自身が青色の紙製の防御服を着せられ、荷物をまとめて、到着した時のエレベーターとは違うエレベーターを使って、外に出た。(到着時のエレベーターに乗ると、また1週間の隔離のやり直し、だとか。) 外では隔離者用に設置されたプレハブ事務所の窓口でホテル代(サービス料、税込み)1日850元、今は円安で1元20円として、17,000円、7日分合計5,950元(約12万円)をクレジット・カードで支払い、待っていたミニバスに乗せられ、自宅マンションのある門迄送られ、無事、娘と対面した。後から帰ってきた孫とも久しぶりに感激の対面をした。

健康コードのこと

自宅では、私と接する家族も3日間、自宅隔離となる。金、土、日の3日間、これから過ごす私の2週間の予定表を作った。月曜日午後から毎日、中国語の学校、月曜日夜は私の歓迎会のダイナー、火曜日はサーカス見物、土曜日は京劇の見物等々。しかし、その行動の前提として、健康コード

を私の携帯に登録せねばならない。どこの建物、コンビニに入るにも、地下鉄に乗るにも PCR 検査の陰性を表示する健康コードを見せねばならないからである。

不思議なことに、私企業である Alipay (支払宝) のネットワークを利用して、健康コードを作成するのである。次女は、自宅隔離中、私の携帯に健康コードを入力すべく奮闘していたが、私の携帯番号が日本の番号のせいか、登録できない。自宅待機中である為、外に聞きに行くわけにもいかない。隔離が解けた月曜日の朝一番、娘はマンションのサービス・ステーションに助けを求めに行った。しかし、そこでも解決せず、マンションを管轄する町の出張所に相談するようにアドバイスされたようである。その出張所は、近所に在って、私はパスポートを持って同行した。幸い出張所は空いていて、担当官が私のパスポートを見たり、娘に質問したりして、携帯を操作していたが、10分ぐらいで、無事に登録された。「助かった～！ ヤレヤレこれで外出が出来る。」出張所の担当官はとても親切だった。その時、上海に渡航する前に、渋谷区役所にワクチン証明を貰いに行った時、若い女性の担当官の態度があまりにも横柄だったので、思わず声を荒げた事を思いだし、渋谷区の担当官との違いに感心させられた。更に、私をびっくりさせたことは、各担当官の受付の前に、ipad ぐらいのパネルが置いてあり、担当官の行政サービスに対し、町民が評価する仕組みになっていたことである。

国レベルかどうか、大袈裟かもしれないが、習政権は、国民に対する善政に本気だな、と思った。

PCR 検査のこと

上海では、毎日、少なくとも3日に一度は、PCR 検査を受ける。無論、無料である。当初、昼休み時に街中の緑地帯に出来ている人の列を見て、宝くじでも売っているのかと思ったら、PCR 検査を受ける人の列だった。その他にも、地下鉄の駅近くの建物の一角など、あちこちで検査をしている。PCR 検査を受けた結果は、携帯にある各自の健康コードに表示される。緑の陰性表示は、24時間以内、48時間以内、72時間以内の検査で陰性であれば表示されるが、場所によっては48時間以内の陰性表示を求めるところもあるから、私は、隔日に検査を受けるようにしていた。

上海の人口は約2500万人。幼児や病人など一人で外出しない人を除く約2000万人が携帯を所持しており、その各自の携帯に PCR 検査の結果が接続されているのである。そのシステムの凄さに驚嘆する。(日本で接触アプリ COCOA を開発しよとして、うやむやになったのとは大違い！)

なお、日系物流会社のニュースによると、8月30日現在、上海には1名の新規感染者が見つかり、1名の無症状感染者がいるとのことであった。感染者が見つかり、その者が居住するマンション1棟が封鎖され、マンション住民全員が外出禁止となる。

地下鉄、バスのこと

解禁された最初の月曜日の午後、早速、中国語の学校へ行った。最初の日ということで、娘がバスの乗り方、降りる場所、学校のあるビルへの入り方（携帯の健康コードのスキャンボタンを押し、ビルのQRコードをスキャンし、そのQRコードが緑になれば入れる。ビルのQRコードをスキャンすることで、私が入ったビルに入った行動が記録される。）を覚えてくれた。私の授業中、娘は近所の喫茶店で仕事をしながら私を待ってくれ、その後は、地下鉄の乗り方を教えてくれるために、地下鉄で布市場に行った。

地下鉄でも、まず、携帯で駅のQRコードをスキャンし（駅に私が入ったことが記録される）、そのQRコードが緑になったことを駅員に示し、大きな荷物は手荷物検査をとおして、それから乗車賃を支払ってプラットフォームに更に降りていく。乗車賃は、ほとんどの人が、携帯で支払っていくが、私の場合は、中国の銀行口座と連動していなかったもので、携帯で支払えず、スイカのようなカードを買って支払った。地下鉄は、上海市内に18路線も開通し、市内の地下を縦横に張り巡らし、しかも、一つ一つの駅は、マイナーな駅でも地下に大きな構内を持っており、シェルターの役目を果たしていそうである。電車のプラットフォームは、その地下の構内をさらに一段降りたところに在る。

上海市内のバス路線もよく整備されていて、高速道路の下にはトロリー・バスも走っている。地下鉄も同様であるが、携帯アプリで行先を入力すれば、何番のバスに乗ればよいか、何分にバスが来るのかなどがわかる。

次の日から、私は、中国語学校へ一人で通学した。行きはバス、帰りは地下鉄を使った。一人でQRコードをスキャンし、緑の健康コードを示して、スクールの建物に入ったり、地下鉄に乗ったりして、あたかも長年住んでいる上海人の振りをした（弥生さんが、飛鳥さんぐらいまで進化したか？）。

ちなみに、QRコードを読み込んだり健康コードが緑色になったりするのには、全てネットの接続が必要である。或る日、突然、私の携帯のネット接続が出来なくなった。パニックになった。その時は、中国語学校への建物へ入る時であったため、私が中国語の分らない日本人だとわかると、近所のお巡りさんがやってきて、（本来なら建物に入れぬのに）18階の学校まで一緒に来てくれて、学校のWIFIを使って、私の緑の健康コードを確認してくれた。とても親切な優しいお巡りさんだった。

その日以来、私は、常に携帯の充電式WIFIを持ち歩くようにした。

布市場で

中国語学校の後に行った布市場は、30店舗以上あると思われる小さな店がそれぞれに既製服や布をぶらさげ、客待ちしていた。私は、早速、娘が選んだ店で夏のワンピース2着をオーダーした。値段の交渉は、これまた一プロセスあり、店主の女性が娘に、3着なら1300円にするとか、言っている。結局、娘も1着作ることにして、めでたく商談は成立。手付金らしきものを、娘は店のQRコードを読み取り、それに携帯で送金していた。（1元20円として、3着で26,000円となり、夏服とは言え、オーダーとしては安い！）

帰りは、当初計画の外灘での私の歓迎会は変更され、他のレストランで食事することにして、タクシーで行く。

上海のタクシー

携帯の「百度」や「滴滴」のアプリで、現在地を示し、行先を入力すると、候補のタクシーが料金と共にいくつか表示され、そのうち適当なのを選ぶと、そのタクシーがやってくる。タクシーの番号や車体の写真、来るルート、来るまでの所要時間も表示される。料金は途中、どんなに混雑しようとも当初に約束した金額である。このように呼び出して来るタクシーは、普通の乗用車であり、当局に登録しているであろうが、副業でやっている者も多いという。勿論、車体の上にタクシーと書いた流しのタクシーも走っていて、呼び止めて乗ることもある。タクシー代はアプリで呼ぶ場合は、1キロ3.5元ぐらいから、距離やその時の需要と供給により決まり、流しのタクシーは初乗り16元で、走行距離による。いずれにしても、タクシーは運転する方も利用する方もシステムが便利で、実に合理的。価格も安く、正に市民の足と言える。

解禁日初日に行ったレストランは、しゃれた街並みにあるイタリアンだった。孫も自宅から、自分でタクシーを呼んで、やってきて、まずは解禁の乾杯となった。

外灘での食事

解禁日初日の私の歓迎会は、外灘(黄浦江の西岸、旧市街側で租界地時代の建物が並んでいる)で対岸に見える高層ビルのネオンのショーを見ながら食事することになっていたが、やはりと言うべきか、今年の猛暑による電力不足で、月・火の両日は、初めてと言われるネオン中止となり、外灘での食事は、水曜日となった。

水曜日に行った外灘から見える対岸の浦東、陸家嘴地区は金融機関はじめ、世界各国から有名企業が集まるビジネス街。高さ500~600メートルのビルが建ち並ぶ。東京で建っている高層ビルは高くても250メートルぐらいだから、如何に上海のビルが高いのかがわかる。また、それら高層ビルは形が様々で、上海世界金融センターの栓抜き形、真ん中に真っ赤な球をつけたおでん型、中でも中国一、世界でも第2の高さ(632メートル)を誇る上海タワーは登り龍の形状をしている。夜になると、光の波が下から、ビルに沿って龍が登るように上がっていく。様々な光のショーは、いつまで見ても見飽きない。改めて中国のスケールの大きな建造物や発想に驚かされた。昔から白髪3千丈と言うが、これもひとえに、中国の領土の大きさに由来するものであろうか。日本の領土の26倍余り、上海だけでも東京の面積の約3倍はある。(人口密度:日本全土 345人/1km², 中国 146/1km², 東京 6,309/km², 上海 3,926/km²)

ある晩、その中国一の上海タワーの118階と119階(546メートル)にある展望台に上った。両脇に他のビルを従えながら、直ぐ眼下には、曲がりくねった黄浦江とその西岸(外灘)にライトアップされた租界地時代の古い建物が見え、その先はどこまでも広い上海市があった。

この展望台には、地下2階からエレベーターで上がるが、エレベーターの入口に取り付けられたスピード計の秒速スピードがめまぐるしく動いている。119階まで1分足らずで到着した。帰りにみたら、このエレベーターは三菱電機製であった。さすがに三菱電機と嬉しかった。後で調べたら、地下2階から119階まで552メートルあり、上り分速1080メートルを出したことがあり、世界最速のエレベーターと認定されているそうである。

街の様子

娘のマンションのある街は住宅街で、道路は3車線の上下と両脇の歩道には街路樹が茂っていて、落ち着いた街並みである。3車線の一番端は、自転車とオートバイ専用で、そのオートバイは音を出さない。スーと走っていくので、街には騒音がない。電気自動車も普通に走っている。歩道の曲がり角には、レンタルの自転車が10台ぐらい停車しており、自転車に乗りたい人は、自転車に貼ってあるQRコードを携帯で読み込み、好きなところまで乗って行く。地下鉄の駅まで徒歩で10分ほどなので、娘はよく自転車で駅まで行くそうである。

街の中心地には、大きなデパートなどがあり、デパ地下が賑わい、高級ファッション店が在るのは東京と同じ、或いは、それ以上かもしれない。中国の女性はスラリとスタイルが良く、肌も綺麗で、思い思いのおしゃれを楽しんでいる。昔なら楊貴妃かな～と思われる女性が一杯。

おしゃれな高級店がならぶ一方で、私が初日に行った一般市民がバーゲンして買う布市場がある。またデパ地下だけではなく、一般的なスーパー・マーケットもある。そのスーパーでは天井に部品工場のようなレールが張られており、時々、買物かごがレールにぶら下げられ、走っていた。このようなスーパーから、娘のような現役世代の者は携帯でデリバリーを頼むのであろう。これとは別に食品市場があり、ここでは新鮮な魚や野菜、果物を売っており、年配者は昔ながらの生活も出来る。

上海は、意外であったが、中山公園をはじめ多くの公園があり、また街のあちこちには緑地帯があって、緑の多い都会である。私は豫園には2~3度行った。広い豫園の一角にある古典的な建物の中で売っている景德鎮で作られた陶器を日本へのお土産にしようと、色々物色するのが楽しかった。

困ったこと

ホテルでは、海外とのネットワークに対応していないと言われ、接続に苦労したが、自宅(娘のうち)に帰れば、解消するものと思っていた。ところが、マンションのWIFIに接続しても、事態は一向に改善しない。通信を良くするVPNというソフトを付けてもダメである。やはり、噂どおり外国とのメールは、政

府がチェックしているのであろう。中国のアドレスは難なく通じるので、私のような外国のメールアドレスはチェックされるようである。丁度、日本のクライアントからの仕事が入り、娘の中国アドレスに送信してもらい、また、娘に返信してもらおうなど日本とのメールのやり取りには本当に困った。ある土曜日、メールがスルーと送信されたので、

「あら、土曜日はチェック、お休みかしら？」

と、つぶやいたら、側に居た娘に

「やっぱり弥生さんね～、お母様は。人間がチェックしていると思っているでしょう。みんなAIよ」

と、またも言われてしまった。

上海ロックダウンのこと

次女は昨年より上海に赴任しているが、日本の中学を卒業した息子を上海に引き取るため日本へ一時帰国していた。上海の赴任地に戻るに当たり、日本を3月23日に出発し、3週間のホテル隔離を大連で過ごしていた。大連で解放された時は、既に、上海ロックダウンが始まり街が封鎖されていた為、幸いにも上海ロックダウンを経験せずに済んだ。その間、彼等は北京の民宿で避難生活をしてきたが、それはそれでユニークな経験をしたようである。3月末から約2か月続いたロックダウンを経験した上海人は、口々に「もう二度と、あんな経験はしたくない。」という。最初は、食料などが不足して困ったが、それが解消しても、何時解除されるかわからないという、先の見えない不安が一番、きつかったという。

上海での暮らしは、東京より快適で、何の不自由も感じないが、ロックダウンのように、何時なるとき、行政の強権が下されるかわからないことが、最も大きなリスクだと娘は言っていた。

中国語学校にて

中国語学校には、解禁日の初日の月曜日から2週間、土曜日・日曜日を省く10日間通った。が、テキストに沿って中国語を勉強したのは、最後の二日間だけになった。自己紹介に始まり、専ら中国事情を若い講師と日本語或いは英語でお喋りすることになってしまった。

彼ら、彼女らは外国人に教えている者だけあって、外国に興味をもっている若者である。大半の国民はそうではないので、今の経済発展した中国の現状に何の不満もなく、生活にさして困ることもなく、平穩に過ごしているようである。しかし、中国語学校の講師達の中には、「1990年代から、外国のテレビ番組が制限されるようになった。」「ネットフリックスやユーチューブが見れない」「face book や google が使えない」と不平を言っていた。 どうしているの？と聞くと、どうしても見たい者は、お金を支払ってVPNを取り付けて見ている、と言っていた。

VPNをつけて、外国の情報を取ることは、法的には禁止されているが、政府はそれを厳しく取り締まっているふうではなく、ある程度大目に見ているようでもある。また、彼等が外国の企業に就職することも、外国に旅行することも、外国に住むことも禁じられているわけではない

かといって、容易く外国企業に就職もできず、また外国に住むことも出来ない彼らは、今後、このような不自由な外国からの情報取得に、いつまで、或いは、どこまで我慢できるのであろうか。いつかは暴発するのではないかと、気がかりである。

一方、政府が、その政策に反する外国情報を制限するのは、止むをえない、と是認するのは、日本にある会計事務所と提携している大手会計・コンサルタント会社のシニア・パートナーである。

また、ある日、女性講師に、「ウイグルで人権侵害があると言って、欧米では非難しているけど知ってる？」と聞いてみた。そしたら、「どこの国でも報道機関は外国の悪いところばかりを報道する。少数民族の人には、学校の入学などで特典を与えたり補助もしている。収容所に入れたという映像もGPSからであり、学校の教室に生徒を入れたものかもしれない」と言っていた。確かに、どこの国のジャーナリストも他国の欠点を吹聴するのが好きであり、また、その情報を受取る者は、直ぐにその情報を信じ、非難したり、優越感に浸るのも事実。この点では彼女と同意見になった。

また、別の講師は「中国には90%の自由がある。10%とは、公式のテレビインタビューを受けたら、習政権はOKと言う」ことだそうだ。私には、「2度の共産党総書記はOKだけど、3度目はNOね。」「彼は威張っているからキライ」「なんでも自分の手柄にするからキライ」といった本音を言う。

考えてみたら、中国人は、今まで、自分たちの手で政府を選んだ経験がない。中国5000年の歴史は、一人の或いはそれに続く皇帝の専制王朝国家であった。また、戦後は、毛沢東をはじめとする共産党支配であり、いわば共産党王朝とも言うべきである。中国人にとって、その王朝、支配者に従うのみで、その支配者を自分たちで選ぼうという発想はでてこない。支配者が墮落し崩壊すると、別の者が天下を取るという歴史を繰り返してきた。要するに西欧とは歴史が違うのである。

それはそれで良いではないか。何も西洋式がベストということはない。民主主義が人類普遍の価値というのはおかしい。ある価値観を普遍的なものとして、他に押し付けたり、他の考えを排除することにより争いは起こる。それぞれの国がその歴史、国情に合わせて、その国を統治していることに他国がとやかく言うことはおかしい、と思う。

コロナ禍で国民の2~300万人が死亡したアメリカ政府がある一方で、中国政府が「人の命は取返しがつかないけれど、経済は後退しても、また回復させることができる」として、都市封鎖に踏み切ったという話は、〈政府とは〉 〈国を治めるとは〉 という命題を改めて考えさせられるものである。

終わりに

今回の上海旅行ほど、「百聞は一見に如かず」と感じたことはなかった。

あんなに進化した街が、すぐ隣に存在しているとは。

上海は、もはや20年前の上海ではないのだ。私が「弥生さん」と呼ばれるように、日本よりずっとIT化し、進化した上海であった。生活は合理的で、それでいて緑あふれる街はきれいで、整然としている。

発展したのは、上海だけではない。娘達が夏休みに行った湖南省張家界という山奥の観光地までも良く整備されていたそうである。そこは、上海から飛行機で西方に2時間ばかり行った山岳地帯で、そこには溪谷にガラス張りのつり橋が掛けられ、多くの観光客で賑わっていたそうである。

日本がぼんやりと20年、30年過ごしている間に、隣の中国は大いに発展していた。Made in Chinaはどこか粗悪で劣悪なもの、というイメージであったが、今ではとんでもない。いつまでも昔の古い考えをもって処していたら、大間違いとなる。

コロナ禍という事もあって、外国に出向くことをためらっていたが、いつまでも自国に留まっていたはダメである。井戸の中の蛙になってしまう。心して、外の社会を見分し、視野を広げ、常に外の世界を知ることの大切さを痛感した。特に、学生や若い人には、大いに外に出向いて欲しい。

中国が、今後も今までのペースで発展するわけではないにしても、日本の26倍という広大な領土を有し、14億人の国民のいる大国である。しかも、その国民は頭脳明晰で、ビジネス・マインドに溢れている者が多い。

原油以外の鉱物は何でも存在するという中国。他国に頼らずとも、中国国内だけで十分立派な経済圏を確立し、独自の社会システムや文化を構築できる。現に、ゼロ・コロナ政策を推進するため、その政策の是非はともかく、健康コードという途方もないシステムを独自に既に開発済みであり、現実にそれを運用している。

中国には、日本企業が1300社ばかり進出しており、17万人余りの日本人が駐在しているという。地理的に至近距離にあり、また、このように人的にも経済的にもコミットしている中国に対して、日本はどのように対峙することができようか。

日本の防衛力はしっかりと堅持しつつも、なんとしても中国と平和的に共存せねばならない。

(了)